

# 舞踊学会第21回定例研究会

デモンストレーションとショーイング

## 「メディアとダンス」

### 概要報告

横浜で榊原氏の講演を聞いた。ネットで何千万回再生されるという話に驚き、そのダンスが簡単に自宅で作られて発信されていることを知り、さらにそのダンスが目の前で再演されたのだが、申し訳ないがその簡便さとテクニックのなさに驚いたのだった。どうしてこのようなものが何千万回も世界中からアクセスされるのか。

今はもうなくなってしまったトヨタコレオグラフィアワードの選考委員をかつてしたことがあったが、その際にまず選考段階でビデオ審査をした。その中にやはり自宅で簡易に撮った映像があり、そのダンスを選びたいという審査員もいたが、それは却下された。このダンスは舞台上げて見るのに耐えられないというわかりやすい判断によってだった。

ピコ太郎がついに一億回を超える再生がなされたというのはすでに2015年の話。コンテンポラリーダンスというダンス作品はポストモダンを経て作品そのものの在り方を問うメタレベルの揺さぶりを受け、またそのダンスはバレエやモダンダンスというようなダンシングするテクニックとヴォキャブラリーとは違う動きを有してオブジェクトレベルとしてのダンススタイルを担っている。しかしこの論点は結局ダンス作品側の論理である。だがここに受け手側の大きな変容が生じていることを無視するわけにはいかない。ダンスはweb上で配信する側からもそして見る側からもコタツに入ってあるいは電車の中で、さりげなく成立するようになったのだから。

わたしたちは18世紀に「芸術」という考え方が整えられて、以降芸術を芸術として鑑賞するようになったと学んだ。バレエはこの18世紀の思潮を積極的に取り込んでバレエ・ダクションが芸術の仲間入りを果たした。その後バレエやダンスは紆余曲折するものの芸術やアートの地位を保ってきた。しかしこのネット上の現象は何なのだろう。しかも音楽以上にダンスというジャンルがこの新しい現象を先導している。

そこで舞踊学会にこの現状を紹介したいというのがこの企画の趣旨である。まずダンスと映像を考えた。この映像という周辺領域とダンスの関わりはアーカイブを通じてすでに150年以上の歴史を持つことがわかる。今回の新しい状況に対する背景を押さえる意味でこの項目を設定して、彼自身BONUSという映像とダンスのコラボレーショ



定例研究会風景

ン企画をしている木村氏にお願いした。そして次に榊原氏には上記の現状とそれを支える背景にwebというメディアの経済的問題が大きくかかわっていることを含めて、実際にこの現象を牽引する氏ならではの現状分析も交えて説明していただいた。そして最後は大橋氏。現役のコンテンポラリーダンスを主催公演する彼は情報メディアでのプログラミングを自らする人でもありこの業界に詳しい。その彼がロボットというオブジェクトとダンスの問題に関心があるというのでご登場願った。土方の発想はロボットの動きを考える上で通ずるといえるのは、人工的なロボットの動きを再現することから人間の動きを逆照射する当然のしかし刺激的な考え方である。それを実践の人から聞きたかったのである。

上記3人の演者をもって例会企画としたが、ダンス環境の急変ぶりに、ダンス作品は、舞踊芸術はそしてその学問はどう向き合っていくのか。示唆に富み、かつどうアプローチしたら良いのかを考えさせられる会になったと企画者は考えている。

(文責：松澤慶信)